

生徒による授業評価をより活かした授業の改善に関する研究

高 谷 将 宏 (常盤木学園高等学校)

1. 研究の目的とその背景

「生徒による授業評価」を活用した、授業改善に取り組み、生徒のより良い学びに繋げることを目的としている。対象とする教科は数学である。

「生徒による授業評価」は、生徒・教員ともに意義を見出し、導入初期に見られた不安や危惧は少なくなってきた（笹田 2009）。

高谷（2014）は、評価に対する生徒と教師の視点の近似性や相違性を明らかにし、教師による自己評価を深くするための視点を示している。また、評価することを通して、授業への参加が促されることも期待されている（笹田 2009）。

先行研究は「生徒による授業評価を実施するための課題」、「結果からどのようなことが読み取れるかについて」、「期待される効果」に関する3つに分類される。この様な中、柳澤（2006）などが「評価の形骸化」を新たな課題として取り上げている。生徒にとっては、「評価を行っても、授業が変わらないことに対しての諦め」、教師にとっては「評価されることへの慣れ」が背景とされている。一方、「評価項目が質問内容を十分に満たしているため、より進んだ改善を求める意見に対応できない。」という、授業評価が追い付いていない状況も存在している（笹田 2009）。

そこで、本研究では、「生徒による授業評価」を活用した授業の展開に着目することとした。これにより、授業に対する生徒の意見や教師の考えの交換を通し、「授業を創る」ことを試み、有効性や具体的な効果についての知見を得たいと考えている。

2. 研究の方法

「生徒による授業評価」の実施と活用状況を把握し、利点と課題を分析するために、アンケート調査を実施した。対象は、新潟県を含む東北地区の私立高校101校の数学科主任の先生方である。実施期間は、2014年7月17日（木）～8月8日（金）に実施し、回収率は61%（62校）であった。

「生徒による授業評価」は、結果をできるだけ早くフィードバックすることが有効である（森岡、池田 1998）される。そこで、「授業開き」において「授業評価」の評価項目の内容を説明し、生徒との共通理解を図った。その上で、中間試験毎に実施している「生徒による授業評価」とは別に「授業評価」を実施した。その結果を生徒に還元し、改善に取り組むこととした。このことにより、「生徒による授業評価」では捉え難い改善点を探ることができると考えた。

分析にあたっては、様々な視点を集約するために、「授業分析会」を実施した。

3. 結果

(1) 実施状況についてのアンケート調査

①実施形態の概要

「生徒による授業評価」を実施しているのは60%（37校）、実施していないのは40%（25校）であった。

以下、分析対象は、実施している37校とする。

「生徒による授業評価」を導入し5年以上になるのは62%（23校うち4校は10年以上）であった。65%（24校）が年度内1回、30%（11校）が年度内2回の実施であった。評価対象は、86%（32校）が授業担当者全員としている。

数学科の先生方に実施の目的が浸透しているかについては、「よく理解している」「やや理解している」が合わせて 75% (28 校) であった。これに対し、生徒が実施目的を理解していると感じるかどうかについては、「よく理解している」「やや理解している」が合わせて 63% (23 校) であった。

「生徒による授業評価」の質問項目は、「教科で統一」89% (33 校)、「全学年統一」95% (35 校)、「全学科・コース統一」92% (34 校) で設定されていた。

②授業と生徒の学習への効果

数学の授業の改善に対する効果については、「とても効果がある」が 8% (3 校)、「やや効果がある」が 62% (23 校) であった。

生徒が数学を学ぶ意欲の変化については、「とても良い変化がある」が 0%、「やや良い変化がある」が 30% (11 校)、「どちらとも言えない」が 35% (13 校)、「あまり変化が無い」が 32% (12 校)、「全く変化が無い」が 3% (1 校) であった。

生徒の数学の学力に変化(向上)については、「とても良い変化がある」が 0%、「やや良い変化がある」が 27% (10 校)、「どちらとも言えない」が 32% (12 校)、「あまり変化が無い」が 35% (13 校)、「全く変化が無い」が 5% (2 校) であった。

③教師による授業改善の取り組み

評価を受けての授業改善への取り組みは、「自己評価が中心」が 54% (20 校)、「自己評価と他者からの評価の両方を行っている」が 43% (16 校) であった。また、「他者評価が中心」とした学校も 3% (1 校) あった。

なお、本研究では「自己評価」を「評価の結果を自分のみで振り返り、授業に臨むこと」、「他者評価」を、「自分以外の指導・助言などの機会があり、その後授業に臨むこと」と定義し、アンケート調査にも明記した。

数学の授業改善の取り組みへの影響は、「とても積極的」が 3% (1 校)、「やや積極的」が

68% (25 校)、「変わらない」が 16% (6 校)、「やや消極的」が 11% (4 校)、「とても消極的」が 3% (1 校) であった。

研修会などへの参加による授業改善の取り組みは、「やや積極的」が 35% (13 校)、「変わらない」が 54% (20 校) であった。教科会議(数学科)の運営の変化については、「やや活性化」が 35% (13 校)、「変わらない」が 62% (23 校) であった。

数学の授業に関する話題や意見交換の機会については、「やや増えた」が 54% (20 校)、「変わらない」が 41% (15 校) であった。教師同士による授業参観の機会については、「やや増えた」が 39% (14 校)、「変わらない」が 56% (20 校) であった。公開授業を含む研究授業については、「やや増えた」が 22% (8 校)、「変わらない」が 76% (28 校) であった。

(2) 授業を創る取り組みの実施状況についてのアンケート調査

対象とした授業は、[表3.1]の通りである。生徒は、全員女子であり、スーパー両立コース(部活動と両立型の特別進学コース)に在籍する生徒である。明るく元気な生徒が多い反面、数学を苦手としている生徒も少なくない。全員が大学進学を希望している。

[表3.1]調査対象の概要

科目名	人数	備考
数学Ⅰ	17	同一生徒
数学A	17	同一生徒
数学Ⅱ	9	
数学Ⅲ	3	

調査に当たっては、校長の許可、教科主任と該当生徒の内諾を得た上で行った。更に、今回の調査への回答が成績評価に影響するものではないことを伝えている。

本校の「生徒による授業評価」の評価項目は、次の通りである。評価尺度は「良い4...3...2...1 良くない」の4択である。

- ア) 先生の授業は分かりやすいですか?
- イ) 実力(知識や技術など)が身につけている実

感はありますか？

ウ) 先生の授業において、授業秩序は保たれていますか？

エ) 先生は、生徒がどのくらい理解しているかを確認しながら授業を進めていますか？

オ) 先生の授業は意欲的に取り組める内容ですか？

カ) 先生の授業中の声は聞き取りやすいですか？

キ) 先生の授業において、黒板への板書は見やすいですか？

授業初回の「授業開き」を利用して、アンケート調査を行った。「生徒による授業評価」の必要性を質問したところ、46名中、89% (41名) が必要である、11% (3名) が不要であると回答した。

評価項目それぞれについて、どのような状態で授業を「良い」、「悪い」と判断するのかについて質問を行った。「良い」と判断する主な根拠は、次の通りである。なお、**生**は、生徒側の要因、**教**は教師側の要因を表している。

ア) **生**納得できる **教**途中式を省かない

教丁寧な説明 **教**教科書に無い要点を紹介

イ) **生**模擬試験の結果が良い **教**<無し>

ウ) **生**集中できる **教**適度な雑談がある

エ) **生**<無し> **教**確認のためのテストを実施

教声掛け **教**高校生の頃分からなかったというエピソードや内容を紹介する

オ) **生**時間が早く過ぎると感じる **生**難易度が適度 **教**熱意がある **教**適度な雑談がある

カ) **生**<無し> **教**滑舌が良い **教**声の大きさが適度

キ) **生**ノートが取りやすい **教**字が見やすい

教レイアウトを統一 **教**余白を指示

「悪い」と判断する主な根拠は、次の通りである。

ア) **生**<無し> **教**進度が速い **教**説明が難解

イ) **生**模擬試験の結果が悪い **教**他者と比較する **教**課題のチェックが検印のみ

ウ) **生**集中できない **教**話しかける生徒が固定

エ) **生**<無し> **教**教師のペースで進む

オ) **生**<無し> **教**問題演習のみ **教**教科書通り

カ) **教**滑舌が悪い **教**声が小さい

キ) **教**字が見難い **教**字が重なっている

教バランスが悪い **教**計算を雑然と書く

その後、中間試験の直前に第2回のアンケート調査を行っている。このアンケートから、寄せられた改善して欲しいことに関する主な意見は、次の通りであった。

[1年] **教**2週間に一度、復習できる問題演習のプリントがあると良い **教**もう少しゆっくり進めて欲しい **教**確認テストを実施して欲しい

[2年] **教**週末課題の出題を金曜日ではなく早くして欲しい **教**もう少しゆっくり進めて欲しい **教**確認テストを実施して欲しい

[3年] 特に無し

こうした意見を受け、定期試験の近くに確認テストを実施、週末課題の出題を、水曜日または木曜日に変更した。また、年間の授業時間数と、学習量の関係により、進度の消化に余裕が無いことに理解を求めた。

6月21日(土)に第1回授業評価を迎えた。結果は[表3.2]の通り。夏休み明けの授業において、評価の結果を生徒に伝え、更に改善に取り組むべき点などについて意見交換を行った。

11月に、第3回のアンケート調査を行った。大きな学校行事もなく授業に集中できる時期である。寄せられた主な意見は、次の通りであった。

[1年] **生**内容が難しく、理解するのに時間がかかる **生**模擬試験だと解けない

[2年] **教**模擬試験対策の問題が欲しい

[3年] 特に無し

これらも受け、2月初旬に受験する模擬試験対策に力を入れることとした。ただし、学校設定教科以外での授業では時間の確保が難しいため、課外や長期休業などでの課題配布が中心となった。

12月16日(火)に第2回授業評価を迎える。結果は[表3.2]の通りであった。冬休み明けの授業において、評価の結果を生徒に伝え意見交換を行った。寄せられた主な意見は次の通りであった。

[1年] **教**ときどき、小テストをして欲しい **教**で

できれば単元毎に確認テストをして欲しい
[2年] 特に無し

[3年] 単位数（標準単位）の関係で進度を消化
するので精一杯なのは、仕方がないと思う

2月初旬に、今回の取り組みについて、感想や
意見を求めた。各学年共通して、次の様な内容が
寄せられた。

- ・評価を活かしてくれて、授業を良くしようという
感じが伝わり、良かった。
- ・評価の結果を知ることができたのが良かった。
- ・「こうして欲しい」という希望があっても、進
度の関係で難しいだろうなと思うこともある。
- ・評価の項目が何を意味しているかについて、あ
まり考えたことが無かったので、良かった。
- ・プラスの意見が多いときは、良いけれど、そう
ではない場合はどうするのだろうと思った。
- ・「こういうものだ」という先生の強い押しがあ
ってもいい。
- ・ちょっと、「今回どう？」と聞かれるのが多い
気がする。

[表3.2a]生徒による授業評価の結果

科目 回/項目	数学Ⅰ		数学A	
	1回	2回	1回	2回
ア)	3.35	3.59	3.53	3.59
イ)	3.41	<u>3.24</u>	3.53	<u>3.18</u>
ウ)	3.76	<u>3.35</u>	3.76	<u>3.35</u>
エ)	3.47	3.59	3.53	3.59
オ)	3.24	3.24	3.24	3.24
カ)	3.53	3.59	3.53	3.59
キ)	3.53	3.76	3.53	3.76

*評価が上がった値は太字斜体、下がった値は下線付
きで表記している。加重平均による値である。

[表3.2b]生徒による授業評価の結果

科目 回/項目	数学Ⅱ		数学Ⅲ	
	1回	2回	1回	2回
ア)	3.75	<u>3.22</u>	3.5	3.67
イ)	3.38	3.44	3	3
ウ)	3.75	<u>3.56</u>	4	4
エ)	3.63	3.67	4	4
オ)	3.25	<u>3</u>	3.5	4
カ)	3.75	<u>3.56</u>	3.75	4
キ)	3.63	3.67	3.75	4

**評価が上がった値は太字斜体、下がった値は下線
付きで表記している。加重平均による値である。

4. まとめ

「生徒による授業評価」を実施している学校
の多くは、生徒の変化よりも教師の変化に有効
性を見出していると言える。教師の授業改善の
ための取り組みは、ややではあるが活発化する。
一方、生徒の意識としては、模擬試験の成績の
様に、教師だけではなく、自分の努力の結果が
求められる内容であったとしても授業の評価と
して反映させる場合があることが認められた。

こうしたことから、評価項目を共通理解す
ることの必要性は高いと考えられる。また、生
徒の感想や意見から、評価項目に対し共通理解
を図ること、結果をフィードバックし授業に還
元することは生徒と教師、授業の改善にとって
有効なコミュニケーションであり、「授業を創
る」ことに繋がると考えられる。今回の取り組
みをこれからの授業にも取り入れていきたいと
考えている。

一方、授業者（筆者）の第2回の評価結果は、
第1回と比較し、下がった項目があった。

授業に対する期待の変化、授業技術などの未
熟さ、教材の内容の深化、共通理解の限界など
が原因として考えられる。こうした点の改善が、
自身にとって授業力を更に向上させるための今
後の課題である。

参考文献

- 笹田茂樹（2009）「生徒による授業評価」に関する
一考察：正則高等学校の事例を中心として。富山大
学人間発達科学部紀要、4（1）：21-28。
高谷将宏（2014）学習者と教師の視点を基にした授
業評価の改善に関する研究。教育情報学研究 13、
57-58。
森岡修身、池田数人（1998）生徒による授業評価に
ついて。日本数学教育学会誌、臨時増刊総会特集号
80：442。
柳澤良明（2006）児童生徒による授業評価、辰野千
壽・石田恒好・北尾倫彦（監修）教育評価事典、図
書文化社、東京、459。